

理研アドバイザー・カウンシル (RAC)

より

理化学研究所理事長及び理事会への報告書 (仮訳：正文は英文)

1993年8月

RACメンバー表

本文

A 前書き

理研アドバイザー・カウンシル (RAC) は、理化学研究所 (理研) の理事長と理事会による研究所の研究計画とその運営とを評価し、理研がその目標を達成するためにとるべき方策を理事長に進言するために1992年に設立されたものである。理研の経営陣はドイツのマクス・プランク協会その他欧米の多くの大学が研究評価や経営者への助言を目的として抱えているヴィジティング・コミTEEの効用を充分心得ている。こうした先例を考慮して、RACは国内外の専門家によるメンバーを順次交代させながら、2年毎に数日間理研に集まって研究所の状況を点検し、次の項目にわたって理事長に報告を提出する常設機関と考えられている。

- (1) 研究の高い水準の維持と研究の活性化
- (2) 強化すべき研究分野
- (3) 新たな研究の方向の提案
- (4) 理研を更に国際化し国際協力を推進する方策
- (5) 多分野にわたる研究の中心としての理研を更に発展させる方策

この報告書は1993年6月21日から24日にわたって開かれた第一回RAC会議の結果である。15人のうち14人が全日程出席した (一人は病気のため出席できなかった。) 会議の議長は前マクス・プランク協会総裁、現IUPAC副会長のハインツ・シュタープ教授、副議長は京都大学岡田節人名誉教授とMIT物理教室ジョージ・クラーク教授である。

B RAC会合のプログラム

1. 理事長および幹部による理研の紹介

会合は6月21日月曜日の朝開始され、先ず理事長小田稔教授から理研の歴史、並びに（科学技術庁傘下の特殊法人として）幅広い研究分野にまたがる研究機関としての理研の紹介があった。小田理事長は研究所の研究分野の幅とその相互関連について説明した。さらに、理事長は国内でも世界的にもユニークな理研の多くの設備が、いかに個々の個別分野や多分野の総合的な研究も推進しているかを説明した。理事長はRACが日本の学術研究の構造や政策にとって果たす革新的な意義を強調した。彼は、RACの評価や提言の率直な報告を希望し、理事会はどのような提案にも真剣に対応するという意志を明らかにした。

ついで、副理事長の佐田教授は、理研の管理機構、46の研究室の研究活動、分野間のプロジェクト及び多分野のプロジェクトのための五つの研究グループ、国際フロンティア研究システム、そして重粒子加速リング・サイクロトロン、SPRING-8放射光施設等の大型設備について説明した。RACにとって特に関心があったのは、研究室の成果の評価の方法、主任研究員が（60才で）退職したあとの研究室の方向付けの決め方等であった。

RACには2冊の白書が渡されていた。そのVol.1には理研の管理機構と運営方針が詳しく記され、Vol.2には研究者、研究題目、予算、各研究室およびグループの研究活動が表示されている。

2. 物理、化学、生物学、医科学および工学分科会

月曜日朝の会合終了後、RACは五つの分野の研究室を視察・調査するために表記の五つの分科会に分かれた。月曜日の午後と火曜日全日は研究室視察、主任研究員とその協力者による報告、研究室のかかえる問題と将来計画の議論にあてられた。火曜日には、医科学の分科会は理研のライフサイエンス筑波研究センターを訪れた。水曜日の朝は、各分科会のドラフト・レポートの用意のために当てられた。

3. RAC本会議

水曜日午後には各分科会のドラフト・レポートを検討して、RAC報告を構成するための一般的な結論や提案を議論した。

4. 理事長および理事会との最終会合

6月24日、木曜日、午前中にRACは理事長および理事会と会合し、その所見と提案そして最終報告書の形式について議論した。原型のままの分科会報告書が理研にとって最も有用と考えられるが、公開には不適當な部分もあるので最後に理事長に手渡されることになった。

理研の運営、政策、構造等一般的な事項に関するRACの作業、所見、提案等に係わる公式報告はRAC全メンバーの検討と承認を得るために用意され、その上でできるだけ速やかに議長から理事長に送られることが合意された。この報告はその結果である。この報告書の所見と提案は、その基になった理研の研究成果の評価も含んでいる分科会報告の考えとあわせて考慮されるべきものである。

C RACの所見と提言

1. 以下の所見は、RACメンバーが一致して合意したものである。

- (1) 理研は優れた研究成果を挙げている。その成果は広く国際会議、レフェリーのついた雑誌等で学会に周知されている。
- (2) 理研は、既にその研究計画の質を評価する制度を備えている。理研の経営陣がこの制度をさらに拡大して二年に一度の国際的な委員会、つまりこのRACによって研究計画と運営方針とを点検しようとしていることは賞賛されてよい。
- (3) 理研の施設は、内部及び外部からの研究者に対して、優れたそしてユニークな、分野間にまたがる研究の機会を提供している。
- (4) 理研は、国内および国外からの研究者がその研究計画に参加することを奨励し助成している。理研で働く外国人科学者の数は、近年急速に増え、現在その数は極めて多い。

- (5) 理研は、研究室に滞在する大学院生の仕事によって得るところが多く、関心を共有する大学との接触を歓迎すべきこととして奨励している。
- (6) 理研のフロンティア研究システムは、とくに重要で質の高い斬新な研究を促進している。

2. RACは、理研が近年とっている方策を強く支持するものである。一方、理研を更に発展させるために、RACは次の提言をする。

- (1) RACは、終身職の研究員の採用に関し次の措置をとることを提案する。
 - a. 全ての空席はしかるべき手段によって募集され、応募には履歴書、論文目録、参考論文を付ける。
 - b. 最も有望な候補者の最終リストを作り、それぞれの候補者について外部からの審査を十分に活用してよく調査する。とくに主任研究員、副主任研究員については国際的に認められていることを確認することが大切である。候補者はそれぞれ最近の研究について理研でコロキウムを行うことが望ましく、候補者に関わる資料と主要な科学者の意見は最終的な採用決定に充分尊重されるべきである。
- (2) 研究者の将来性は、30才代半ばには未だ予見できないことが多い。従ってRACは、上に述べた措置とともに、現行の副主任研究員以下の研究員の採用に対する「32才以下」という年齢制限を引き上げることを提案する。RACは、この年齢が引き上げられれば、理研のポストドクが正規の研究員採用のためのすぐれた人材のプールになりうるかと考える。
- (3) 理研内部並びに理研と外部の研究グループとの交流をさらに促進するために、RACは次の提案をする。
 - a. 理研の地理的に離れた研究施設の相互交流は、多分適当な交通手段が提供され、相互にセミナーが交換されることで図られよう。

- b. 関連のある研究を実施するグループのための共同利用措置を十分に備えること。
 - c. 現在は欠けている分野を含めて、内部及び外部のスピーカーによる定期的（毎週）なセミナーを奨励し、予算をつけること。
- (4) 大学院生を理研の研究に参加させることをさらに推進して、最高レベルの学生を導入することにとくに努力すること。
- (5) 大型施設（即ちリング・サイクロトロン、SPring-8大型放射光施設）については、所内の科学者による活発な施設利用を維持しつつ外部の科学者をも支援しなければならないという理研の科学者の現在のオーバーロードを軽減するため、新しい組織を工夫する必要がある。
3. 以上の提案の中でも、終身職の研究員の採用手続きに関する提案はとくに重要と考えられる。RACのメンバーは、これらの提案が実施されることによって、科学界において既に理研が保持している名声が更に高まり、その将来が保証されることになろうと考える。